

politics in the age of  
globalization

# グローバル化時代の 政治学

加藤哲郎・國廣敏文 編  
Tetsuro & Kunihiro Toshifumi

法律文化社 (2008年)

## グローバル・デモクラシーの可能性

—世界社会フォーラムと「差異の解放」「対等の連鎖」—

### 1 問題の所在 —世界経済フォーラム対世界社会フォーラム

二〇〇三年二・一五非戦平和運動の画期性

二〇〇一年九月一日の米国同時テロ以来、私の個人ホームページ「ネチズン・カレッジ」は、丸山真男『自己内対話』（みすず書房、一九九八年）の言葉を掲げている。「戦争は一人、せいぜい少数の人間がボタン一つ押すことで一瞬にして起せる。平和は無数の人間の辛抱強い努力なしには建設できない。このことにこそ平和の道徳的優越性がある」と (<http://www.friju.or.jp/~katote/Home.html>)。

世界の非戦世論、反戦運動と国連加盟国の多数の反対をも押し切って、アメリカ合衆国ブッシュ政権は「対テロ戦争」の名でアフガニスタン、イラクへの戦争を強行し、米英軍はバグダッドを軍事的に制覇した。やがてイラ

加藤 哲郎

ク・フセイン政権と九・一一テロの関係ばかりか、侵攻の口実とされた大量破壊兵器そのものの虚偽も明らかにしたが、宗教対立と結びついた内戦は激化し、アメリカの占領が続いている。

日本の自民党・公明党政権はそれに追従し、テロ対策特別措置の名で自衛隊をインド洋からイラクにまで派遣した。その勢いで、安倍内閣では防衛庁が防衛省に昇格され、憲法典に軍隊を明記する道を開く国民投票法案が強行採決され、教育基本法に「国を愛する心」が盛りこまれた。

こうした動きに対して、世界の民衆の希望はどこにあるのか。ここでは、二〇〇三年二月一日、人類史上未曾有の戦争勃発前の非戦平和運動、全世界で一五〇〇万人がイラク戦争反対の街頭行動に出る原動力となった運動体、「世界社会フォーラム」に焦点を絞り、そのグローバル政治と民主主義にとつての意味を考えてみよう（加藤「情報戦の時代——インターネットと劇場政治」花伝社、二〇〇七年、参照）。

#### 世界経済フォーラム——政財界エリートのダボス会議

世界社会フォーラムといっても、あまりなじみはないだろう。ただしその相方、世界経済フォーラムについては、どこかで聞いたことがあるだろう。

世界経済フォーラム (World Economic Forum, WEF) の年次総会、通称ダボス会議は、毎年一月末、スイスの冬のリゾート地ダボスに、世界の多国籍企業経営者、有力政治家、著名エコノミストが一同に集い、グローバルな政治経済について討議する社交場である。世界中のマスコミが取材し、テレビや新聞で報道され、インターネット上にも大きなホームページを持っている。地球規模の経済問題を自由に討論する政財界人サミットで、「賢人会議」ともよばれる。

もともと世界経済フォーラム・ダボス会議は、スイスの公益財団が主催する法人会員制の国際シンポジウムであった。一九七一年に、ジュネーブ大学クラウス・シュワブ教授（現理事長）の提唱した「欧州経営フォーラム」から始まり、当初のメンバーは欧州経済人のみであったが、市場競争中心の新自由主義を掲げ、サッチャーリズム、レーガノミクス台頭の波に乗って、世界のトップリーダーが集まる場に発展した。八七年に名称を「世界経済フォーラム」に変更、九六年からはグローバル化を積極的に推進する先導役とみなされた。そのため、金融取引への課税（トービン税）を求める国際 NGO アタック (Association for the Taxation of Financial Transactions for the Aid of Citizen, ATTAC) などの標的となり、雪山の高級ホテルで軍隊と警察に警備されて開催されるようになった。

#### 反ダボスの世界社会フォーラム

世界社会フォーラム (World Social Forum, WSF) は、ダボス会議に対抗して、二〇〇一年一月にブラジルのポルトアレグレで初めて開催され、民衆の立場から、グローバルイニシアティブのもたらす問題群を考え集ってきた社会運動である。

一九九九年シアトル WTO 反対運動の流れを汲むことから、しばしば「反グローバルイニシアティブ」運動と同一視されるが、実際は「もうひとつの世界は可能だ」を合言葉に、世界の格差構造を見据え、地球的連帯と民主的で現実的な代替案を求める多数の NGO・NPO・社会団体によるグローバルなネットワークである。アメリカのイラク攻撃に反対する平和運動の世界的高揚でも、中心的役割を果たした。

その発足の経緯と歴史的軌跡については拙著『情報戦の時代』に詳しく紹介したので、ここでは政治学の理論的対象として、世界社会フォーラムを取り上げる。

世界社会フォーラムは、二〇〇一年一月の第一回フォーラムの後、「世界社会フォーラム憲章」一四原則を確認し、以後の発展の枠組みとなった。全文は私の監修したフィッシュャー・ポニア編『もうひとつの世界は可能だ』（日本経済評論社、二〇〇三年）および拙著『情報戦の時代』に紹介してある。ここではとくに重要と思われる原理的項目のみを掲げる。その合言葉が、「もうひとつの世界は可能だ」である。フランス語では、alernondalismeという言葉も定着した。

一 世界社会フォーラムは、公開された討議の場です。わたしたちは考えを深め、アイディアを民主的に話し合い、提案をまとめます。経験を自由に交換し、効果的な行動を追求します。ここに参加するのは市民の団体や運動組織です。わたしたちはネオリベリズムを批判し、資本主義や帝国主義が世界を支配するのに反対します。人間同士が実り多い関係を築き、人間と地球が豊かにつながる地球社会を作り上げるために行動します。

四 世界社会フォーラムは、巨大多国企業とその利益に奉仕する諸国家・国際機関が推進しているグローバリゼーションに反対し、その代替案を提案します。世界史の新しい段階として、連帯のグローバル化が生まれるでしょう。そうなるなどこの国においても、どんな環境におかれていても、男女を問わず市民の権利、普遍的な人権が尊重されます。社会正義・平等・市民主権に奉仕する民主的な国際社会の仕組みと国際機関がその基礎となります。

八 世界社会フォーラムは、さまざまな価値や考え方を認め、信条の違いを超え、政府機関や政党とは関係を持ちません。もうひとつの世界を打ち立てるために、中央集権にならない方法で、団体や運動組織がたがいに連携し、地域レベルから国際レベルまで具体的に活動をすすめます。

九 世界社会フォーラムは、多元主義（ブルーリズム）を尊重する開かれたフォーラムでありつづけます。参加を決めた団体や運動組織のあり方も、その活動も多様なものになります。憲章の原則に基づいて、ジェンダーや民族性、文化、世代、身体能力などの違いを受け入れます。政党や軍事組織の代表者は参加することができません。政府指導者や議員が憲章の原則を守ることを誓うなら、個人の資格でフォーラムへ招待されることもあります。

一三 世界社会フォーラムは、連帯を生み出すための仕組みです。わたしたちは団体や運動組織の結びつきを、国内でも国際間でも強化したり、新しく作り出したりします。この連帯がわたしたちに力を与えます。世界中の人々が耐え忍んでいる非人間化の過程や国家が使う暴力に対して、公共の場でも私生活の場でも非暴力の抵抗をつづける力が高まるでしょう。また、団体や運動組織が人間らしさを取りもどすためにする活動をより強いものにするでしょう。

一四 世界社会フォーラムは、一つの過程です。わたしたちは、参加する団体や運動組織の活動が、地域レベルから国家レベルへ、さらに国際レベルへとすすみ、地球市民として問題と取り組んでゆくことを奨励します。変革を目指す実践活動がいます。わたしたちは、こうした運動を全世界の人々の課題へと導き、連帯して新しい世界を築きます。  
(<http://www.kcne.jp/gauss/jsf/charter.html>)

## 2 政治学の対象としての世界社会フォーラム

定点観測の場、多様な問題と政策、インターナショナル

世界社会フォーラムは、日本のマスコミではほとんど取り上げられないが、インターネット上では、すでに百科事典ウィキペディアの英語版・日本語版に入っている。世界社会フォーラムについての交流サイトや参加記は、日本でも数多い。

日本語でまとまったかたちで読める書物としては、私たちの訳したフィッシュャー・ポニア編『もうひとつの世界は可能だ』の後に、ジャイ・センほか編『帝国への挑戦』（武藤一羊ほか監訳、作品社、二〇〇五年）も翻訳された。私の『情報戦の時代』や他のいくつかの書物では、世界社会フォーラムを紹介し分析対象にして、その歴史的・政治的意義を論じるようになった。

第一に、世界社会フォーラムは、毎年一月末開催で、世界経済フォーラムやアメリカ大統領年頭教書と同時期に決議・宣言が発表されるため、二一世紀のグローバルな世界情勢について、現代政治学にとつてはきわめて貴重な定観測の場、参与観察可能な社会運動となっている。

第二に、それは世界的規模での社会運動でありながら、地球上のさまざまな運動・組織の参加者が一同に会してグローバルズムを議論するため、そこには地球上のあらゆる問題に対する現状分析と代替政策が提示され、政治文化の比較、政策運動としても多様な性格づけが可能で、豊かでユニークな分析対象である。

第三に、世界社会フォーラムをインターナショナルな運動組織体とみなすと、それは、過去におけるさまざまな運動体の歴史的教訓を踏まえた、新しい特徴を帯びている。それは、二一世紀の社会運動、グローバルな民主主義のあり方についての重要な経験であり、問題提起となっている。

第一の点については、すでに拙著『情報戦の時代』で詳しく論じたので、本稿では、第二、第三の点について見てみよう。

### 多様な運動体によるひとつの運動

世界社会フォーラムは、社会運動としても政治組織としても、その多様性において際立っている。実際、世界社会フォーラムに参加した人々は、参与観察の結果として、きわめて多様なイメージを報告している。

例えば「もうひとつの世界は可能だ」に寄せた「序文」の中で、かの『帝国』の共著者マイケル・ハートとアントニオ・ネグリは、「新たな民主的コスモポリタニズムであり、国境を越える新たな反資本主義であり、新たな知的ノマド主義であり、マルチチユードの偉大な運動を代表するもの」という。「反グローバルズムが合流する場」

「平原に広がる無限のネットワーク」「多様な運動体によるひとつの運動 (the movement of movements)」「多様なネットワークによるひとつのネットワーク」「新しいインターナショナルリズムの象徴」等々とも特徴づけた。

ジャイ・センほか編『帝国への挑戦』の「監訳者まえがき」で、二〇〇四年ムンバイ会議に参加した武藤一羊は、「ただの国際会議とも、抗議デモとも、お祭りとも、巨大見本市とも呼べない。しかしそのすべてでもある。またその合算以上の何かである」と述べた。さまざまな視角からさまざまに位置づけうる多面性を持つ。

同様な多様性は、編者であるジャイ・セン自身も語っている。それは「開かれた空間」であると共に「イベント」であり、「複数のオルタナティヴ」を持つ「多様な運動体から成るひとつの運動」の「プロセス」でもある、と。

同書の中で語られる特徴付けを、敢えて論者を挙げずに、付け加えてみよう。

その「開かれた空間」性に焦点を当てると、「議論の場」「アリーナ (闘技場)」「広場」「マーケット」「舞台」「教育的空間」等のイメージが浮かぶ。

その内部の「多様性」自体は、「ジャズの共鳴音、違って見える絵画」「乱雑さ、非構造、カオス、コミュニケーション」「グローバル世論」等々と特徴づけられる。

「運動」としての側面は「グローバル・エンパワーメント」「市民的政治的イニシアティヴ」「水平的ネットワーク」「反グローバルリズム、反新自由主義抵抗」「グローバル・ジャスティス運動」「促進者、進行役」「反帝国主義運動」「批判的ユートピア、南の認識論、政治的創発」「貧者の国連」等々となり、中には「脱前衛」「希望のインターナショナル」「ポスト・マルクス主義アナーキズム」といった自己規定もある。「ロゴ、象徴、宗教、寺院」としての性格を持ち、「生命系民主主義」「自己民主主義」「サバルタンの自己組織系サイバースペース」といった特

徴付けも可能である。それらの総括的表現が「もうひとつの世界は可能だ」となる。

それらは端的に、世界社会フォーラムが「多様な運動体によるひとつの運動」「多様なネットワークによるひとつのネットワーク」であることを示す。事実、そこには、金融、貿易、多国籍企業、労働、環境、水、著作権、医薬品、食料、都市化、先住民、暴力、戦争、移民、メディア、文化、芸術、人権、民主主義、差別、ジェンダー等々、今日世界で問題になるあらゆるイシューでの運動体が参集し、それぞれがそれぞれの仕方でも抗議し、演技し、訴え、討論する広場となっている。

#### 六つの差異と対立点

したがって、世界社会フォーラムには、現代世界の多種多様な運動体が集っており、その「もうひとつの世界は可能だ」の政策的含意も、それぞれに異なる。時にそれは、フォーラム内部の対立としても現れる。

『もうひとつの世界は可能だ』「序論」で、フィッシャー・ポニアは、世界社会フォーラム内部の「差異」を以下の五つの対立点に整理し、後に一つを追加した。

- (1) 革命か改良か？ 差異のいくつかはイデオロギー的であり、「革命か改良か」という、よく知られた左翼の議論の範囲内にあるものである。この種の討論のなかで、もっとも知られた政策表明は、IMFの「権限剥奪」を求めるいくつかの運動体によりよびかけられることで登場した。他方、IMFその他の国際金融機関との交渉の重要性を説く主張がある。前者のグループは、国際金融機関の脱正統化を要求するグローバル・ガバナンスの多元的形態こそが解決法だと考え、後者のグループは、現在のグローバル諸機構には根本的な欠陥があるわけではなく、それは市民社会の関与を通じて改善できると考える。

- (2) 環境か経済か？ 差異の第二の領域は、成長や消費を減速させることを求める環境主義者たちと、さらなる成長と雇用創出を求める労働者の要求とのあいだにある。この論争は、「木々を救うのか、それとも仕事を守るのか」と戯画化されるか、あるいは、生命系民主主義 (Living Democracy) か人間中心主義かということで、枠付けることができる。
- (3) 人権か保護主義か？ 差異の第三は、労働運動それ自身のなかに存在している。北の労働運動が国際貿易や投資協定の中に人権基準をとり入れるべきだと要求することは、南の労働者にとっては保護主義の口実と受け取られることがしばしばある。その一方で、北の労働運動は、南が具体的な取り決めを行うことを拒否するとき、かれらの人権問題への関わり方に疑問を持つのである。
- (4) 価値の普遍性か？ 争われている四点目は、西欧的な価値と普遍的な価値との関係にかかわる論争である。この二つを単純に同一視することができるのか。西欧的な諸価値を普遍的に受容することに対するオルタナティブは文化相対主義なれば、普遍的諸価値を、周縁化された経験を承認しつつ、構成することができるのか。どうす
- (5) ローカルか、ナショナルか、グローバルか？ 五番目の重要な紛争点は、政治的要求の地理的な差異——ローカル、ナショナル、そしてグローバル——にある。イデオロギー的な立場の違いが、異なった統治規模に優先性を置かせる。ある活動家たちは、前進の第一線はローカル化にあると主張し、それゆえ彼らは直接民主主義、ローカル・ガバナンス、補完性原則、経済的自給自足、文化的自律や食糧主権を要求する。もうひとつの主張は、急進派によって運営される新しい形態の国家というもので、それは、市民社会によって確立された基準によって統制される参加民主主義原理によってなされる。第三の立場は、金融投機への課税や世界議会や世界レファレンダムのような、グローバルな形態の規制という提案である。異なる統治規模の強調は、グローバルな正義と連帯を求める運動の潜在的な断層線を構成している。

- (6) 政党か社会運動か？ そして、フィッシャー・ポニアは、『帝国への挑戦』に寄せた「ポルトアレグレの木の下で——もっともラディカルな民主主義」の中で、もう一つの対立点「政党と社会運動間の争い」を追加して

いる。

世界社会フォーラム憲章第八には「政府機関や政党とは関係を持ちません」とあるが、個々の政党員の参加や発言を排除するものではない。いや実は、ポルトアレグレでの開催には市政与党ブラジル労働者党の力が大きいし、ブラジルのルラ大統領は世界社会フォーラムで演説した後にダボスの世界経済フォーラムにも出かける。フランス社会党やドイツ社会民主党からは代表団が派遣され、「国際議員フォーラム」も開かれるようになった。

フィッシャー・ポニアは、政党は社会運動の要求を取り込んでしまう傾向があるが、同時に、政治的活動家が前進するための多くの有益なアイデアを提供するために欠くことはできない、という。要するにつかず離れずの関係で、日本でも、毎年の世界社会フォーラムを熱心に報道する全国紙は、日本共産党機関紙「しんぶん赤旗」だけという逆説に現れている。

そして、これらの矛盾は、グローバルな社会運動としての世界社会フォーラムの運営上の問題として現れる。第一に指導部の問題、第二に財源の問題、第三に民主主義の問題である。

それが端的に現れたのが、二〇〇四年のムンバイ・フォーラムであった。ここでは、第一に中央集権的な指導体制への危惧が語られ、第二に、それまでブラジルでは得ていたフォード財団からの五〇万ドルの資金を返上して参加費等自主財源でまかない、しかし第三に、これまでのあり方にあきたらない実力主義グループが、世界社会フォーラムの会場の近くで、「ムンバイ・レジスタンス二〇〇四」という暴力的抵抗を認める左翼だけの集会を開催した。

### 3 生命系民主主義——連帯を可能にする哲学

ラディカルで参加的な生命系民主主義

こうした差異と多様性を処理しまとめる原理を、フィッシャー・ポニアらは、「民主主義の新たな創造 (the reinvention of democracy)」と捉える。その特質を、主としてヴァンダナ・シヴァとエルネスト・ラクラウ・シヤンタル・ムフに依拠して、「ラディカルで参加的な生命系民主主義」「地球民主主義」と特徴づける。

ヴァンダナ・シヴァの「生命系民主主義 (Living Democracy)」の主張は『情報戦の時代』で詳しく紹介した。ここでは別のインタビュアー発言を引いておこう。それは、かつて日本の市民運動で語られた「ライブリー・ポリティクス」とも異なる。

生命系民主主義運動という名称は、ヒンズー語で「ワスンダヘーバ・クトウンバカン (地球はひとつの家族)」を意味する深い意味を持つ言葉を翻訳したものです。すべての木々や川、植物や牛もすべて一つの家族です。私はこれを生命系民主主義運動と呼びます。それは、私たちの運動が現在の代表制民主主義とは異なるものであることを強調するためです。……生

一つ目に、それは私たちすべてのために存在する、ということですが。それは政治家や議員のためにはありません。それはすべての市民のためとだけではありません。すべての市民のためであると同時に、すべての生命のためのものです。従ってここでは、生態系が中心に据えられます。

二つ目に、生命や死に関して関心を強く持つために「生きている」民主主義ともいえます。企業の利益ではなく、私たちが生きていくために不可欠な水や食料、農家が生きていくための適正な所得を第一に考えます。

三つ目に、生命系民主主義運動はそれ自体「生きている」のです。従来の民主主義は民主主義として機能しておらず、死んだも同然です〔グローバルイズムを越える生命系民主主義〕<http://www.jimmin.com/doc/0113.htm>。

フィッシャー・ポニアは、この論理を援用し、「生命系民主主義」で、自然・環境問題から労働政策にいたるグローバル民主主義の問題領域の広がりを示す。

「民主主義の新たな創造」の概念に含まれているのは、生命系民主主義、すなわち「地球民主主義」(シヴァ)の考えである。それは、惑星全体の資源が、将来世代だけではなく、すべての生物にとって必要なものであると自覚することである。

ラディカルで参加的な生命系民主主義は、日常的に社会を再構築しているすべての市民にかかわるものである。それは、資本、国際金融諸機構、メディアや技術への相対的独占のうえで意思決定が予めなされてしまうような今日のグローバル社会から、あらゆる領域で直接民主主義的な意思形成により決定がなされるようなグローバル社会への移行である。……そこには、対外債務をめぐる民主的な公的統制、企業の民主的規制、団体交渉のグローバル化、分権化されたローカルな連帯経済、世界水会議、ローカルな食糧主権、資本と国家を監視する市民社会、すべての人々に対する無償教育、執行可能な社会的経済的文化的諸権利、そして、連帯の文明のための新しい諸価値が含まれている。これらすべては、エリート的な経済的政治的人種主義の利益や家父長的な利益によって制約されることのない意思形成である、民主主義の新たな創造を指し示している。

#### 参加民主主義とラディカル・デモクラシーの接合

そこで彼らは、地球上のあらゆる問題領域に、「参加民主主義」とラクラウ・ムフの「ラディカル・デモクラシー」の論理を徹底しようとする。

私たちが定義する「民主主義の新たな創造」とは、経済の生産様式、政治的ガバナンスの構造、科学的革新の普及、メディア

アの組織化、社会関係および社会と自然の関係が、ラディカルで参加的な生命系民主主義のプロセスに従うような、新しい社会の創造を意味している。……官僚主義化と代表制民主主義の今日的諸形態によって作り出されているエリート支配、技術主義、階級主義、人種主義、性差別主義や政治的無関心を乗り越える重要な一步として、繰り返し確認されている。ポルトアレグレの参加型予算や、インド・ケララ州の参加計画(パラメスワラン)に現存するような参加プロセスの発展は、本能的に新しい政治的経済的構造を追求することを、同時に含意するにちがいない。「参加民主主義」は、代表制民主主義の根主化のために必要とされるさまざまな諸制度、ネットワーク、プロセスや認識に関連する。それは、参加型予算や住民投票、制憲議会、補完性原理、多元主義への信頼、多様性への希求、経験による確証、そして「日々の生活の知恵」といったものである。

「ラディカル・デモクラシー」は、民主主義が十全に機能することを阻んでいる既存の階級的・ジェンダー的・人種差別的な権力関係を、徹底的に変革することを求める。ラディカル・デモクラシーの基本的な出発点は、ポスト資本主義的で民主的な生産様式の発展である。この生産様式が社会主義経済なのか、連帯経済なのか、エコロジック経済なのか、それともこれら三つが結合したものなのかどうかははっきりしない。大切なのは、どの生産様式を採用しようとも、それらはラディカルな参加民主主義プロセスの方法で作動することである。同様に、政治的ガバナンスの構造が地域主義的であれ、国家主義的であれ、国際主義的ないしグローバル主義的であろうと、ここでもまたそれは、ラディカルな参加民主主義プロセスの方法で作動することになるだろう。

#### 巨大化し祝祭化したフォーラムの危機

だが問題は、世界社会フォーラムの実際の運営に関わる。年に一度、時期も一月末と定められているとはいえず、世界中からさまざまな文化と言語を持って集う一〇万人もの人々に、コミュニケーション可能な「開かれた空間」となる会場を確保し、財源を集め、さまざまなイベントの場と日程を割り振り、中核的企画やイベントを自ら企画

し組織しなければならない。これらはメーリングリストで連絡・調整され、ホームページで広報されるにしても、そのための管理者は不可欠で、各国語への翻訳や通訳も必要になる。大会が近づけば、宿舍の確保や会場警備、資料づくりや配布もどこかでセットされなければならない。要するに、いかなるボランティア団体にも必要な事務的・実務的仕事は、だれかがしなければならぬ。

そのようなものとして、世界社会フォーラムにも組織委員会・国際評議会があり、大会のさいには全体会議、テーマセッション、ワークショップ、パフォーマンス、青年キャンプ、屋台バザール等が設定される。「ソーシャル・ムーブメント総会」や「反戦ムーブメント総会」といったイベントも開催される。踊りや音楽をまじえて練り歩くピースマーチなど、多彩な表現でのデモンストレーションが行われる。

それは、世界社会フォーラムにとって、その存在意義の間われる場である。なぜならば、世界社会フォーラムは、一方で「多様な運動体によるひとつの運動」「多様なネットワークによるひとつのネットワーク」であると共に、ダボス会議に対する「対抗フォーラム（広場）・アリーナ（競技場）」「新自由主義グローバル化への抗議と抵抗」の政治の場であり、「貧者の国連」「国境を越えた想像の共同体」「審議体なき教育的・政治的空間」という「討議空間」としての意味を付与されている。

事実、二〇〇四年のムンバイ・フォーラムで矛盾が顕在化した後、〇五年は再びポルトアレグレに戻って一五万人を集めたが、〇六年は一同に集う方式をやめて、地域フォーラムを各地で開く方式を採った。〇七年アフリカ・ケニアで六万五〇〇〇人を集めたフォーラムはその商業主義が批判され、〇八年は一月二六日に世界各地でさまざまな行動を創意的に企画する「グローバル・アクション」方式に決まった。巨大化し祝祭化した世界社会フォーラムをどのように運用し継続するかは、それ自体、大きな対立点になった。

#### 共通の敵——新自由主義グローバル化による差異の階層性

そうした運動が共に歩んでいくうえで、決定的意味を持つのは、フィッシャー・ポニアによれば、第一に、「共通の敵」としての「新自由主義グローバル化」の設定であり、それが「差異の階層性」を作り出していることの共通認識である。

こうした差異にもかかわらず、さまざまな運動は、いくつかの合意点で、統一されている。そのひとつは、共通の敵を認識していることである。多くの記録文書が主張していることは、企業資本主義（新自由主義的グローバル化）の拡大が、問題を引き起こしているということである。また、企業支配は、北の世界で最も強力な諸国家が南の経済的政治的エリートと共同することによって、グローバルな空間を横断して編成されているという認識である。同時に、企業資本主義の拡大は、政治的、経済的、文化的、人種的、ジェンダー的、性的、エコロジ的、そして認識論的差異の抑圧と結びついて、起こっているのである。

現存する形態でのグローバル化の決定的な特徴は、伝統的で抑圧的な社会階層秩序を再生産し再接合し混合する能力をもつことである。新自由主義的グローバル化は、たんなる世界の経済的支配ばかりではなく、差異を垂直的な形態にまとめあげ、公衆に平等主義的で対等な条件に基づく多様性を想像することを禁じる、差異の一枚岩的思考（pensamiento unico）を押しつけるものでもあるのだ。

#### 下からのグローバル化を求める三つの潮流

第二に、にもかかわらず、共通の敵の構造的な位置づけは、少なくとも三つの思想潮流に分かれており、その正統性とヘゲモニーは、民主主義の土俵上で争われる。



さまざまな潮流の活動家団体は、経済的、文化的、あるいはテクノロジーの押しつけに強調点を置く。たとえば社会主義者たちは、経済に強調点を置くので、新自由主義的グローバル化の本質を資本主義のグローバル化と定義する。アイデンティティ・グループ（文化多様性派）は、消費主義に強調点を置くので、グローバル化をアメリカ的「マックワールド」の植民地主義的な拡大であると定義する。エコロジストは、テクノロジーに強調点を置き、したがってグローバル化をリスクの拡大とみる。

このような異なった分析は、お互いを排除することはない。しかし、おのおのに新自由主義的なグローバル化が押しつけた挑戦に対して、特定の対処法と解決法を持っている。社会主義者たち、アイデンティティ・グループとエコロジストの三つすべてが同意しているのは、画一的な経済政策、文化的な実践、およびテクノロジーのリスクがグローバルな空間を横断して押しつけられている、という確信である。世界の公衆は、WTOの指導者や、視覚的な空間を支配するための宣伝広告や、遺伝子組み換え食品の生産を研究することを、自ら選んだわけではない。すべての運動は、世界の民衆の要求に応えることになるであろう「下からのグローバル化」という、新しい民主的なプロセスを求める点について一致している。こうした必要は、まさに運動の敵の反民主主義的な性格ゆえに、焦点となるのである。

### 差異の解放・水平化と対等の連鎖

そこで、具体的に運動を組み上げる論理が、フィッツジャーポニアによると、「差異の解放・水平化」と「対等の連鎖」の論理である。

考えるべき中心的な疑問は、世界を横断するさまざまな運動の多様な目標をたがいに縫い合わせる共通のビジョンをどの程度想定しているのか、新しいグローバルな左翼、新しいグローバル社会の共通の枠組みを提示しているのか、ということである。ラクラウムフは、新自由主義に対する実行可能なオルタナティブは、さまざまな社会運動のオルタナティブが合体した場合のみ立ち上げることができる、と主張している。こうした合体をひき起こすためには、オルタナティブの哲学

的・政治的論理の差異（たとえば社会主義、無政府主義、環境主義、フェミニズム、土着性や多文化主義）に、対等の連鎖（chain of equivalence）をかけなければならなくなる。

対等の連鎖とは、ひとつの新しい考え方であり、運動の多様性を認めつつ、さまざまな運動の根本的な目的が相似性を持ち、原則や政策、手続きをアーチ状に覆うことを介して実現することができるという認識をもたらすような、ひとつの対抗的ヘゲモニーの言説である。対等の連鎖は、さまざまなオルタナティブの中のひとつが、すべての運動が直面する挑戦を解決する力があり、すべての運動が求めるような新しい社会を創出することができるということを示したときに生じる。たとえば、歴史的に見れば、社会主義は、左翼の多様な利害のなかで対等の連鎖を確立した共通の言説であった。「他方」新自由主義は、過去三〇年の間に、新古典派経済理論、リバタリアニズム、社会的保守主義を結集させることによって政治的右派を一体化する役割を演じたのである。

対抗的ヘゲモニーの言説は、つながりのない運動に対して、彼らの個別の問題での長期的な利益は共通のプロジェクトを追求することによって適えられることを示し、それらを織りあわせる共通の縫合糸を持たなければならない。それは、たんなる抵抗の言説では成就することはない。対抗的ヘゲモニーの言説は、抵抗の言説を含みこむ。それは、かつてたんなる水平的な差異、公正中立な関係と解釈されていたものが、実は抑圧の序列的關係であるということを示すことによって、新しいかたちのラディカルな主体性をつくりあげる。しかしながら、対抗的ヘゲモニーの言説は、こうした序列的關係が、より大きな集合的プロジェクトを遂行することによって覆すことが可能で、対等なものにすることができるということをもまた示すのである。すなわち、ビジョンを持った言説を提起するのであり、ユートピアを指し示すのである。

### ソ連型共産主義を反面教師にした共有の原理

こうした原理は、二〇世紀のソ連型社会主義・共産主義運動の対極にある。

ソビエトのプロジェクトが失敗したために、また近代の普遍理論に対するポスト構造主義的批判と結びついた差異の政治

が台頭したために、進歩的な運動は、グローバルな運動全体が追求すべき社会を定義することについて、いかなるグループであれ前衛的な役割を果たすことに慎重になった。したがって、現代の対抗的ヘゲモニーは、共通のビジョンを接合する潜在勢力を排除することなく、差異を尊重することを受け入れなければならない。もし、グローバルな運動を成功させようとするならば、彼らは、各々がひとつの目的に収斂し、同時にそれぞれの差異を保ちつつけるようなビジョンを産み出さなければならない。

たしかに、「各々がひとつの目的に収斂し、同時にそれぞれの差異を保ちつつけるような」原理は、二〇世紀の社会運動に見られた「統一と団結」「鉄の軍隊の規律」「民主集中制」のような「一枚岩的思考」とは鋭く対立する。階級同盟や統一戦線のような、あらかじめ主体を構造的に設定し、指導階級や前衛党を設定する構えとも異なる。日本語の文脈では、「小異を捨てて大同につく」という発想とも異なり、むしろ「差異を尊重し、相互承認して、大義につく」あり方である。

そこでの結び目は、同盟であるよりも連合である。垂直的統合に反対し、水平的連帯のみを受け入れる、分権的ネットワークである。

その連帯可能性を現実のものにするのは、おそらく「コモンズ」共有の志向である。それは第一に「情報の共有」であり、第二に「経験の共有」であり、第三に「目標と大義」共通の敵の共有」である。それを時々の「場と時間の共有」「行動の共有」「情動の共有」として集結し、「責任とリスクの共有」として完結する。

ただし、「価値の共有」がどこまで可能であるかは、あらかじめ定められておらず、むしろ「多様なネットワークによるひとつのネットワーク」「多様な運動体によるひとつの運動」のなかで競合し、試されていくプロセスと理解される。

## 二〇世紀の民主主義理論の実験場

以上のように、世界社会フォーラムは、二一世紀の民主主義理論にとつてもきわめて刺激的な、問題提起的な社会運動である。「各々がひとつの目的に収斂し、同時にそれぞれの差異を保ちつつける」「差異を尊重し、相互承認して、大義につく」を原理とする世界社会フォーラムの実践は、民主主義が普遍的に受け入れられるようになった二〇世紀のさまざまな経験を踏まえ、二一世紀に民主主義理論を発展させるうえでの、壮大な実験場となっている。

今日の政治学における民主主義理論研究では、中谷義和教授によって翻訳されたデヴィッド・ヘルドの『民主政の諸類型』（御茶の水書房、一九九八年）が、世界的なスタンダード・テキストになっている。

原書 *Models of Democracy* (Polity Press, 1987) は第四版まで版を重ね、著者ヘルド自身によって増補・改訂されているが、その九つのモデルの類型化が、C・B・マクファーン『自由民主主義は生き残れるか』（田口富久治訳、岩波新書、一九七八年）の四つのモデル（防衛的民主主義、発展的民主主義、均衡的民主主義、参加民主主義）を原型としていることは、よく知られている。

古代ギリシャの「古典的民主政」モデルを始原に設定し、近代民主主義をホッブズ、ロック的な「防衛型民主政」、ルソー、J・S・ミルらの「発展型民主政」、それにマルクス、エンゲルスの「直接民主政」としたうえで、二〇世紀にウェーバー、シュンペーターの「競争型エリート主義民主政」、ダールらの「多元主義」という自由主義と民主政の折衷型をおいた。さらに、その延長上での二〇世紀末の対抗を、ハイエク、M・フリードマン、ノージックらの新自由主義「依法型民主政」と、マクファーン、ペイトマン、プーランザスの「参加民主政」の対抗に見いだし、ヘルド自身は「自由社会主義」「民主的自律性」「世界市民型民主政」を理念型として提示していた。

二一世紀型民主主義の討議Ⅱ闘技場

ただし、ヘルドの「民主的自律性」は、新自由主義の市場万能主義、小さな政府論に対抗し、ローカル、ナショナル、グローバル・レベルでの分権自治・補完性原理の積み上げを企図したものだだったが、同時に、ギデンスらの「第三の道」に通じる折衷主義的性格を持っていた。

そのため自由民主主義に転じた自由主義Ⅱ「防衛型民主政」の系譜から、ロールズの正義論やアマルティア・センの潜在能力アプローチが現れ、リベタリーアンとコミュニタリアンの対立が生まれる流れは、十分に組み込まれていなかった。

しかも、マルクス主義や社会民主主義を含み込んだ「発展型民主政」「直接民主政」「参加民主政」の系譜からは、ラクラウ、ムフらの「ポスト・マルクス主義」を飛躍点として、フランスのポスト・モダン思想の問題提起をも組み入れた「ラディカル・デモクラシー」の流れが生まれてきた。

「ラディカル・デモクラシー」は、安易な個人の自由と平等・参加の統一には向かわず、一方でハーバーマスのコミュニケーション理論等に示唆を受けた「熟議民主主義・討議民主主義 (deliberative democracy)」やポール・ハーストらの「協同主義的・結社民主主義 (associative democracy)」へ、他方でジャック・デリダの差異・差存の哲学やミシェル・フーコーの権力論をも組み入れたコノリー、ムフらの「アゴンのデモクラシー」「闘技型民主主義 (agonistic democracy)」へと展開していった。

いいかえれば、グローバルイズムに乗った「依法型民主政」、新自由主義への対抗は、規範理論としても実践の指針としても、二〇世紀の自由民主主義や社会民主主義のような折衷主義的妥協を許さず、「参加民主政」を、生産手段国有化や中央集権的計画経済を基礎におくことなく「コモンズⅡ共有」「連帯経済」を創出して「直接民主

政」に近づける課題、同時に、自由主義の核心である市場経済や個人主義、少数意見の尊重をもラディカルに組み入れ深化する方向を要請する。

この点で、世界社会フォーラムは、ちょうどダールの「多元主義」が最大限の自由と参加の均衡する交点に「ポリアキー」を設定したように、「熟議型民主主義」と「闘技型民主主義」の双方のグループを実際に抱え込んで、民主主義の可能性を最大限に汲み上げ、かつ、個人の差異と自由を徹底的に尊重しようとしている。

しかも、ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバルという「規模のデモクラシー」の問題を、「補完性原理」の導入で安易に均衡させようとはせず、自然生態系と動植物環境をも含む「生命系民主主義」にまで押し広げ、公共性論や市民社会論のダイナミクスをも実践的課題として引き受けることによつて、理論的にみても、二一世紀的な思考実験のフォーラム、多数者民衆（マルチチュード、サバルタン、プレカリアート）の討議Ⅱ闘技場となっている。

4 歴史的意味——情報戦時代の社会運動の万国博覧会

歴史のなかで想起され喚起するもの

最後に、こうした世界社会フォーラムのあり方を、歴史的に位置づけてみよう。

「ラディカルで参加的な生命系民主主義」、「差異の普遍主義」や「連帯経済」を前提とし「対等の連鎖」で結びつける「多様な運動体によるひとつの運動」は、それぞれの論者の思想的・政治的立場からある種の親近性を想起させると共に、ある種の違和感をも誘発する。ベルトルト・ブレヒト流に言えば、感情移入の同化作用と共に、批

判的思考と新たなイメージを喚起する異化作用を持つ。

じつさい世界社会フォーラムは、現場に行かない場合でも、インターネット上に膨大な論文・資料、写真やビデオが色彩豊かに収録されており、さまざまなイメージを喚起する。

例えばマイケル・ハートは、世界社会フォーラムを、二〇世紀後半の「非同盟運動」になぞらえて、バンドン精神、南の国民国家連合、中立、民族自決、主権平等、内政不干渉、等々の観念とオーバラップする。

武藤一羊は、より長いスパンで、「一九世紀後半から二〇世紀の九〇年代にソ連の崩壊という形で幕を閉じた世界社会主義運動」という「世界的規模の社会運動の第一波」に対して、世界社会フォーラムを、「一九六八年のラディカリズム」に起源を持つ形成途上の「第二波世界変革運動」として位置づけ、そこにはなお「古い政治と新しい政治」「垂直派と水平派」の対立が孕まれていると見る。

ジャイ・センは、これを「新しい社会運動」の延長上におき、「イングルハート・テーゼ」の脱物質的価値やシングル・イシュー運動、女性・反核・環境運動、人権・市民権運動、NGO・NPOの多彩な合流点に、世界社会フォーラムをおく。

しかし、ミシェル・レヴィのようなトロツキー派、第四インター系の活動家にとつては、それまでのさまざまなインターナショナルの異端派運動の経験が合流する「希望のインターナショナル」「第五インター」にも見えてくる。

一九八九年東欧革命を「テレビ時代のフォーラム型革命」と捉えた私の立場からすれば、「フォーラム」とか「アンシエーション」「リゾーム」「ネットワーク」という二〇世紀末の運動思想の流れで受容できる。同時に、二〇世紀に第三インターナショナル＝コミンテルンの歴史的意味を考えてきた視角からすると、世界社会フォーラム

は、「インターナショナル」という運動と思想の流れの枠内には入りきれない。

インターナショナルと万国博覧会のメタファー

結論的に言えば、世界社会フォーラムは、一九世紀半ばの第一インターナショナル結成時のあり方と、ある種共通する発想、インスピレーションを惹起する。だがその二一世紀版であることで、第一インターとは異なる。そこにはなお第二、第三、第四インターの陥穽に連なる矛盾を内包しているが、別の新たな可能性をも孕んでいる。ヴァルター・ベンヤミンは、「パサージュ」論の中で、第一インターナショナル（国際労働者協会）の一八六四年創立に、万国博覧会が「間接的な意義」を持ったという。パリのパサージュからフリーエのファランステールを連想し、サン・シモン主義者のアイデアから「商品という物神への巡礼」「商品の宇宙」である万国博覧会が生まれ、「娯楽産業」に連なる「民衆の祭り」となった流れを再考した延長上で（『パサージュ論』1 パリの原風景』岩波書店、一九九三年）。

たしかに第一インターは、もともと一八六二年にロンドンで開かれた万国博覧会に二百名のフランス労働者の代表団が派遣され、イギリス労働者と接触・交流することから始まった。この時代に労働者が海を渡り他国の労働者と交流し連帯すること自体、ある種の博覧会的意味を持った。

それは、マルクスが期待した労働者階級の階級的結集というよりも、さまざまな人種・信仰・国籍を持つ非抑圧者・弱者の、さまざまな経験と志向を持つ抵抗運動・改革運動の緩やかな連帯という意味で、後の労働組合・社会主義政党の国際連絡組織である第二インターナショナルや、ソ連型共産党の鉄の規律で垂直的に組織された第三インターナショナル（コミンテルン）に比べれば、フォーラム的だった。

インターナショナルを超えるグローバル民主主義

だが第一インターナショナルは、またその後の第二、第三、第四インターも、労働者階級をアプリアオリに指導的  
主体と設定することで、その系譜が二一世紀の社会運動の主役になること自体に、懐疑の眼を向けられている。そ  
もそも第一インターは、正式名称をInternational Workingmen's Associationと名乗ることで、人類の半分を占め  
る女性を排除していた。イギリスとフランスの労働者の接触から始まったにしても、その広がりには、せいぜいヨー  
ロッパ規模での「博覧会」「見本市」であった。

第二インターナショナルの創立は、パリ万博とエッフェル塔に象徴される科学主義、進歩主義、人間中心主義、  
西欧中心主義の雰囲気の中で、労働者が工業生産力を「わがもの」にする方向で構成された。その労働者階級とは、  
西欧帝国主義本国の賃金労働者であり、「反動的」農民や植民地民衆は視野に入らなかった。

レーニンの「戦争を内乱へ」を體現したロシア革命から、第三インターナショナルは生まれた。その垂直的中央  
集権と軍事的規律（民主集中制）こそ、今日世界社会フォーラムにおいて最も警戒されているものである。第三イ  
ンターのスターリン主義的継承に対する鏡像、トロツキーの第四インターも同様である。

そのうえアントニオ・グラムシを援用すれば、第一インターの時代の一九世紀型機動戦も、二〇世紀に生き残っ  
た第二インターの陣地戦も、第三インターに生まれ世紀末に崩壊した機動戦と陣地戦の接合、前衛党主導の統一戦  
線も、二一世紀の情報戦時代には適合しえない（加藤二〇世紀を超えて——再審される社会主義「花伝社、二〇〇一年」  
そもそも「インターナショナル」という国民国家を前提とした発想を越えたところに、グローバルな「もうひとつ  
の世界」は成立する。

だから、世界社会フォーラムが生き残る道は、インターナショナルの歴史の再現ではありえない。「生命系民主

主義」の観点からすれば、まさに万国博覧会風の社会運動の見本市を、「差異の解放と対等の連鎖」の精神を、ど  
のように持続できるかに係っている。ここでもまた、ヴァンダナ・シヴァの思想が、引照点になるだろう。

世界社会フォーラムはインドのクンバメラ祭のようになるべきです。クンバメラ祭は世界の創造を祝う地上最大のお祭りで、  
三〇〇〇万もの人びとが集まってガンジス川で沐浴をします。沐浴は毎日するものですけれど、クンバメラは二二一年に一度  
だけ行われる大祭です。同じように、私たちが毎日する政治の「沐浴」は地域ごと国ごとで行う活動ということになります。  
世界社会フォーラムは一〇年に一度か二度だけ開かれればいいでしょう。世界社会フォーラムを制度化して機械的に繰り返  
すなら、私たちの運動は古くさい政治形態と似たものになってしまうでしょう（「自然と人間」二〇〇四年二月）。

「生命系民主主義」「地球民主主義」への道は、足もとの生活世界における日常的な民主主義の実践の、グローバ  
ルで色彩豊かな無数の組織りである。手作りと機械織機とコンピュータ制御による自動織機によって編まれるさま  
ざまなパッチが織りなす、絨毯作りなのである。

#### 【参考文献】

- ウィリアム・F・フィッシャー・ロトマス・ポニア編『もうひとつの世界は可能だ』加藤哲郎監修、日本経済評論社、二〇〇三年  
ジャイ・センほか編『帝国への挑戦』武藤一羊ほか監訳、作品社、二〇〇五年  
ヴァンダナ・シヴァ『世界社会フォーラム——持続可能な経済と平和を築く政治を求めて』「自然と人間」二〇〇四年二月号  
デヴィッド・ヘルド『民主政の諸類型』中谷義和訳、御茶の水書房、一九九八年  
加藤哲郎『情報戦の時代——インターネットと劇場政治』花伝社、二〇〇七年  
加藤哲郎『情報戦と現代史——日本国憲法へのもうひとつの道』花伝社、二〇〇七年  
加藤哲郎『国境を越えるユートピア』平凡社ライブラリー、二〇〇二年

加藤哲郎『二〇世紀を超えて——再審される社会主義』花伝社、二〇〇一年  
Jose Correa Leite, *The World Social Forum: Strategies of Resistance*, Haymarket Books 2005.  
Boaventura de Sousa Santos, *O Forum Social Mundial: manual de uso*, Cortez Editora 2005.

2008年4月10日 初版第1刷発行

グローバル化時代の政治学

編者 加藤哲郎  
國廣敏文

発行者 秋山 泰

発行所 株式会社 法律文化社

〒603-8053 京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71  
電話 075 (791) 7131 FAX 075 (721) 8400  
URL: <http://www.hou-bun.co.jp>

©2008 T. Kato, T. Kunihiro Printed in Japan  
印刷：(株)富山房インターナショナル／製本：(株)藤沢製本  
装幀 白沢 正

ISBN978-4-589-03094-8